

2012年8月2日(木曜日)の福島民報に 被災地支援の記事が紹介されました。

2012 今と生きる 夢を目指すパン 同郷の避難者に

浪江出身 中島 七虹さん 18

「私たちが作った自慢のパンを食べて元気になってほしい」。今春、浪江高を卒業し、栃木県那須塩原市の「パン・アキモト」に就職した浪江町出身の中島七虹(ななこ)さん(18)は二十八日、町民が避難している二本松市の仮設住宅を訪れ、パンやドーナツなどを振る舞った。

同社は震災後、毎月被災地を訪れ、差し入れしている。中島さんが被災者と知った秋元義彦社長が「地元

の仮設住宅でパンを配るな

いかに」と提案した。二十八日は郭内公園、建設技術学院跡、塩沢農村広

二本松の仮設 巡り差し入れ

場の各仮設住宅を回った。このうち郭内公園では、同級生の家族らが出迎えた。「元気だった?」「パンを

ありがどう。知人と久しぶりに話せたことが何よりもうれしかった。中島さんは原発事故後、飯館村の親戚宅や郡山市の避難所などを転々とした。その後、郡山市の借り上げ住宅に入居し、二本松市の安達高内にあった浪江高のサテライトで学んだ。「嵐

のような避難生活だった」と当時を振り返る。現在は寮生活を送り、同僚と共にパン作りの勉強に精を出している。就職後、ホームシックになり、今度も度々「古里に帰りたい」と思う。「一流のパン職人になる」という目標があるから頑張れる。「夢は浪江町に自分の店を持つこと。今ほどにたく勉強し、自分のできることをしていく」と心に決めている。



仮設住宅の住民にパンを手渡す中島さん(左)